

自然葬：人間としての尊厳を全うする葬送

葬送の自由を進める会

関西支部会員交流会

2015.10.17 (土)

安藤 和子

【1】人は生まれ、生きて、そして死ぬ

人生を思い思いに生きて、様々なことがあり、苦しんだり楽しんだり、・・・

幸せな人は老いを通過し、そして最期は例外なく、・・・必ず死ぬ

そうして次の問題が頭に浮かぶ、どうしようか、と。 葬儀？ 遺骨？ 墓に納骨？ 或いは？

【2】葬送の方法

日本：「残酷・無情・無力感・悲しみ・諦観」など仏教的な日本の死生観に基づいた葬式が一般的
キリスト教：死後、クリスチャンは天のキリストの元に還る。この世での別れは悲しいのは事実である
が、しかし、聖書的には、キリスト者本人にとっては喜ばしい帰国・凱旋である
バリ島・ヒンズー教：天国へ行く晴れの儀式。ガムラン音楽で賑やか。水辺で火葬し水に流す

【3】～ 終活・・・人生を締めくくる道 ～

#葬儀は？ : 豪華な葬儀 → 中等 → 質素 → 0葬 (葬儀も何も一切なし)

#墓をどうするか？ : 先祖代々の墓？ 近くに新しい墓？

*死後、「人の実質」は、墓の骨に眠っているのか？

*墓の管理：先祖や親の墓参りをする？ 自分の墓へのは、子どもや孫に墓参りして欲しいか？

*自然に還る・・・散骨？ 樹木葬？ 水葬？

#遺体

*遺体に霊は宿っているのか？

*ただの死体？ 物質？

*火葬後の遺骨に意味はなく、ただの物質なので廃棄処分にする？

【4】世界観・人生観・死生観

#人生の最期をどのように締めくくるかは、根底にある人生観・死生観・世界観に依存する

*命はどこから来たのか？

*人はどういうものか？

*人はどうして尊いのか

*何のために生きるのか？

*人と動物とはどう違うのか？

*死とは、何か？ 死後、どうなるのか？ 死後、何処へ行く？

*肉体の全てが消滅するのか？ 盆に“霊”が戻ってくる？

【5】様々な葬送方法

#水葬 ヒンズー教徒：水辺で火葬後、遺骨を川などに流す
インドのガンジス川流域等の水葬（宗教上の理由）は有名
船上での死亡の場合、海洋に遺体を投じて水葬にする

#風葬 10-50 m の高い岩山に横穴を穿ち、遺体と一緒に人形・副葬品も置かれる。
遺体を風に曝し、風化によって自然に解体されるのを待つ

#鳥葬 鳥葬を行う民族にとって遺体損壊ではなく、魂の抜け出した遺体を「天へと送り届ける」ため
の、死者を弔う厳粛な儀式である。

死体の処理は、鳥葬を執り行う専門の職人が行い、骨も石で細かく砕いて鳥に食べさせ、後にはほとんど何も残らない。遺体を解体しない場合は、骨格はほぼ原形を保っている。

日本語では鳥葬と翻訳されているが、中国語では天葬、英語では空葬 (Sky burial)

#火葬 ヒンズー教・野外で火葬する。

日本：奈良時代から火葬が増えた。1973年火葬禁止令。2年後、1975年に禁止令は解除
現在は、火葬が一般的。遺体は火葬に付され、骨上げされる。

【6】日本人の遺骨信仰

- *いつの頃からか、日本人には遺骨信仰が芽生え、遺体や遺骨を拝む風俗が出来た。
- *第二次大戦中に外地で戦死した日本兵の遺骨収集に出かけ、「こんなところでいつまでも放って置かれて辛かったですよね」云々と遺骨に語りかけて、手を合わせて拝む。
- *「人の本質」は、遺骨に残っているのか？

#日本人に浸透している遺骨信仰の中身：

- *関西地域では収集する遺骨は約1/4~1/3位。遺骨の残り7~8割は火葬場が処理
- *遺骨を拝む部分とゴミに分別。遺骨は全部で平均約2.5kg(性差、個人差、焼却炉温度が影響)

┌ ゴミの部分：約2kg、産業廃棄物として捨てる
└ 拝む部分：残りの0.5kg

#墓地への埋葬・埋葬する理由・・・歴史的視点

- *死者に敬意を表し、尊厳を守り、死者と社会との繋がりを記憶する等、半ば心情的な理由があるだろう。また死者の安らぎを守る、死後の世界で再生、往生、復活できるように願う、又は遺体の復活を恐れ、宗教的な措置をし、物理的に脱出を困難にするなどという宗教的な理由もある。
又、遺体を放置するのは見栄えが良くない、衛生上の問題もあるだろう。
- *現在、お墓はコンクリートで固められ、陶器の骨壺に遺骨の数分の一を納めて埋葬する。即ち、墓を掘り起こさない限り、昔と異なり、骨は半永久的に土に還ることはない(昔は数十年で土に還った)。
- *「死後、同じ墓に埋葬されたい」と望む人々、逆に婚家の墓に入りたくない妻たちも少なくない。死後の遺骨のホンの一部だけなのに、どの骨と一緒に埋葬されるかが気になるのは理屈に合わない話である。遺骨の大半は、まさしくどこの馬の骨か分からない骨や諸々のゴミと一緒に埋められるのに。
- *墓石などを立てると、管理する人がいなくなる問題が如実に表面化してきた。墓地を造る場所がなくなってきたこともある。
- *この世界で、どのような栄誉を得ても、高い地位を得ても、又は無名のままの人生であっても、ホームレスであっても、全ての人が死んで土に還る・・・いつ、どのようにしてかは分からないが・・・。
- *ミイラにされた人々は、永遠に土に帰れないのか？コンクリートの墓や納骨堂では半永久的に「骨」のまま置かれ、震災などで墓も土砂も一緒にひっくり返ると、その骨は泥の中にごろごろ転がってしまう。これが死者に敬意を表することだろうか？尊厳を守ることだろうか？

#樹木葬

- *墓地として許可を得た場所に「埋める」。墓碑は樹木
- *日本では1999年以降に採用され始めた埋葬方法、宗教に縛られない、墓石よりも低費用で済む
- *墓石を立てていないが、墓地として参拝するか又は参拝したい人が多いようである。

#宇宙葬

- *シリンダー状の容器に数グラムの遺骨を装填し、数十ないしは数百人分の遺骨を同時に打ち上げる。
大人の遺骨は平均2.7kg(♂)、1.8kg(♀)なので、5gは全遺骨の僅か0.19~0.28%に過ぎない。これは「宇宙葬」の定義に該当し難い。98%の遺骨は、どこへ？
- *ロケット能力の制約等があり遺骨は地球の重力圏を離脱できず、地球周回軌道に乗る事が多い。

【7】自然葬・・・自然葬という言葉はSJS安田前会長の発明

#海、山等に遺体・遺灰を還して、自然の大きな循環の中に回帰する葬法。

自然に還るということは、自然に投げ捨てるということではない。この点に関しては後述するが、0葬などという考えは本質的に異なる。

自然葬を望む根底には、**自然との一体感**という日本人が本来抱いていた感性・思いがある。
死後は自然の大きな循環の中に還るという死生観があり、伝統的葬法が現代に復活したのだろう。

自然葬の定義

狭義：散骨

広義：風葬、鳥葬、水葬、土葬、樹木葬、冷凍葬など、自然に回帰する葬り方全般

葬式仏教とか金びか葬儀への批判

日本社会の都市化、核家族化、少子化、高齢化等で墓の継承が困難になり葬送法が多様化
墓地造成に伴う自然破壊に批判・環境対策

自然葬の例

* 1990年、ライシャワー元駐日米国大使の遺灰が、「日本とアメリカの架け橋になりたい」との遺言により太平洋に撒かれた。

* 沢村貞子・SJSの顧問だった * 中国の周恩来首相

【8】自然葬・・・人が最後に自然に還ることの意義

科学的検証

* 土の成分

炭素：燃える炭、ダイヤモンドも炭素

酸素：空気中に20%存在、呼吸して生きるエネルギーを得る

水素：火を付けると燃え（酸素と反応）、水になる

窒素：空気の80%は窒素ガス

ナトリウム・カリウム・塩素・・・結合するとただの「塩」

カルシウム・・・白い粉 リン 硫黄

マグネシウム・鉄・銅・亜鉛・マンガン・セレン・ヨウ素

アルミニウム・ケイ素・モリブデンなど

* 人を構成している元素

人は大量の水を含有しており、60~70%が水である（体重60kgとすると約39kgは水）。

水以外の構成成分（固形分、21kg）の分析結果

主要元素：酸素、炭素、水素、窒素 18.9kg 89.8%

微量元素；マグネシウム、カルシウム、硫黄、リン、ナトリウム、カリウム、塩素

2.0kg, 9.7% この微量元素を加えると、人体を構成する元素の99.5%になる。

超微量元素：鉄、銅、亜鉛、セレン、マンガン、ヨウ素、クロム

0.0079kg (7.9g), 0.038%

超微量ではあるが、それぞれは必要不可欠な元素である。鉄も超微量なのである。

* 人を構成する元素組成は、土の組成と質的に酷似している。

量的には人が構成されるために、ある元素は土の中の存在比より桁違いに大量で、他の元素は逆に土での存在比より桁違いに少ない。即ち人を形成する元素組成の相対的な比率は特別に整えられている。人を構成するために物質的に特別な成分比に整えて造られた器に、人としての実質「いのち」が与えられて人となっている。

命の始まりの視点からの検証

* 1・・・進化論的視点

進化論的思想に立つと、生命の発生から人の誕生までは、偶然と悠久の時間（~数十億年）を経て、土やチリから遂に生命の単位である細胞が出来、そして、その後も全て偶然に、順次上等の生物になり、遂に人となったという仮説である。すなわち、人の成り立ちの元は、「土・チリ」からであり、それが組み立てられて人となったと考えられている。

したがって、死後、元々の土に還ることは、科学的思考に立っても、進化論的にも、自然なことである。

* 2・・・聖書の証言

創世紀 2 章 7 節 神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれそこで人は生きものとなった。

3 章 19 節 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

コリント人への手紙第二 4 章 7 節 私たちは、この宝を、土の器の中に入れていたのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

人は全知全能の創造主により土から創造され、いのちの息を吹き込まれたと明確に記載されている。そして、この世の命を終えた後は、創られた元の土に還るのだと述べられているのである。私たちの本質は、この土の器に入れられている。すなわち、この体は土で造られた器なのであり、それは科学的にも証明されている。但し土の器であっても何にも代えがたい尊い命を入れる器なのである。したがって、尊い本質が入れられていた土の器を、鄭重に、そして速やかに土に還す自然葬が聖書的にもっとも理に適っており、まさしく死者に敬意を表し、人間の尊厳を大切にする葬送の方法である。

【9】人が葬られるべき最高の道

自然葬は死者への敬意、尊厳を損なうか？

SJS はその始まりの経緯は「環境保全」が発想の土台であったこともあり、葬送の儀式的最後の段階（遺骨の行方）だけに関わってきた。だが、「環境保全」が出发点であったとしても、遺骨、遺灰を投げ捨てるという思想ではなかった。遺骨は遺族によって鄭重に扱われ、自然に還る旅立ちを、愛を持って見送るという建て前を固持していたように思う。

昨今、0 葬という思想が SJS に持ち込まれてきた。遺体を火葬場に送り込み、後は火葬場で勝手に「処分して下さい」という思想のようである。日本人の遺骨信仰が一方の極端だとすると、これは反対側の極端である。上述の埋葬する理由の「遺体を放置しておくが見栄えが悪く、衛生上の問題もある。法律的にも遺体を放置できない」という、犬猫の死体を扱うのと同じ思想である。これでは、死者への敬意、尊厳が問題になるのは当然である。

真の自然葬・・・人間としての尊厳を全うする葬送

人は生まれ、生きて命を全うし、眠りにつく。器である体は後を留めず、速やかに土に還る。

近年、墓がコンクリートで固められ、骨壺が陶器製になって遺骨は土に還ることが半永久的に出来なくなって、骨のまま放置されることになった。しかし、昔はそうではなかった。土葬（布に包んで、或いは木製の棺に納めて）も、火葬しても、素焼きの骨壺に納めるか或いは布袋に入れて、土に直接置いて埋めたので、長くかかっても数十年で土に還った。水葬、鳥葬（天葬、空葬）にしても、時間的な差はあってもやがて土に還る。

秩序正しい整然とした道筋を辿って土に還る最高の方法は自然葬である。この世との繋がり最後の最後を優しく、美しく見守って、骨の形を留めず速やかに土に還して上げることこそ死者へ敬意を払うことであり、人間としての尊厳を全うすることが出来る方法だろう。大切な人を入れていた器である体を火葬に付して「煙」にし、遺骨は全て残らず収集し、そして遺灰にまで砕いた後に、海へ又は山へと、土に還る最後まで鄭重に見送ることが、最高の葬送ではないだろうか。

自然葬の一連の見送りの流れ・儀式は真の意味で「美」そのものであり、大切な人が元の土に戻っていくのを安らかに見送ることが出来るのである。遺灰を包んだ紙袋が数々の花束に囲まれて、青い海原の波間に漂う光景は遺族に慰めを与えてくれるのである。